

歴史

# 2 海から見た鹿児島の歴史



田村 省三  
TAMURA Shozo

尚古集成館  
館長

19世紀後半、日本及び日本近海は欧米先進諸国の利害が微妙に衝突する場所になってきていた。そして、アジアの国々が植民地化されていく中で、その危機を救い、日本の独立を守った鹿児島の青年達が受け継いできた薩摩のDNAとは何か。

### 島津氏と海

現在、NHK大河ドラマで「平清盛」が放送されている。その平氏は、現在の佐賀市付近にあった肥前神崎庄や大宰府を日宋貿易の拠点として富を築いた。さて、平氏滅亡後、鎌倉幕府による九州支配は、この地が平氏の強い影響下にあったことから当初より困難を極めた。したがって、宋の商人の荘園領主らに対する従来の私的な貿易も黙認するほかはなかった。しかしながら、この地域における交易の権利を獲得しない限り、鎌倉幕府が貿易の主導権を掌握することはできなかったのである。

もともと近衛家に仕える武士であったこれむねたけ惟宗忠久は、元暦2(1185)年、源頼朝によって南九州にあった近衛家の荘園「島津荘」の荘官に任命された。以来、忠久は島津を姓とし、南九州を領し続けた島津家の初代となる。

島津氏系図は忠久を頼朝の庶子と記すが、その出自が頼朝に近侍した一族であったことは明らかになっている。そのような人物が、なぜ都から遠く離れた日本南端の荘官に任じられたのであろうか。その理由の一つに、幕府による交易路の掌握と交易権の確立があったことは想像に難くない。古来、鹿児島は海に開かれた場所であり、その歴史は海とのかかわりの中で形づくられた。

### 中世の東アジアと日本

考えてみれば、時代は降るが、鉄砲もキ

リスト教もその受け入れ口は南九州であった。その背景には、この地域が古くから中国や朝鮮、東南アジアとの交易を重ねてきた事実がある。

中世の倭寇、とりわけ14～15世紀にかけて出沒した倭寇は海賊としてのイメージが強いが、16世紀の倭寇の中心は、福建・広東諸地域の海上交易者、すなわち密貿易商人の集団である。しかもこの時代の世界の銀産出の1/3を供給したとされる日本の石見銀山の銀製産を背景とする日本商船の南下が、東アジア地域の経済に波及してこれら密貿易の横行に拍車を加えた。

また、大航海時代の到来によってポルトガル人がこの海域に関心を示しはじめ、天文12(1543)年、鉄砲を種子島に伝えたポルトガル人をジャンク(中国古



写真1 現在の鹿児島港

来の木造帆船)で案内したという五峯(王直)がのちに平戸・五島を拠点とする倭寇の頭目となり、徐海と名乗った倭寇が大隅・薩摩を拠点としたのも同時代である。

さらに天文18(1549)年、フランシスコ・ザビエルがマラッカから鹿児島まで乗船してきたジャンクの船名は「海賊号」と言い、中国人船長の名をアヴァンと言ったが、彼もまた倭寇であった可能性が高い。

倭寇のみならず、海を介した交易活動は地の利を得ていた九州の諸大名、とりわけ島津一族においても盛んで、特に南薩を支配する島津氏にはその傾向が強かった。その結果、当然相応の経済力を有することになる。

### ジョルジュ・アルバレスの『日本報告』

この時代、鹿児島を訪れた西洋人は鉄砲を伝えたポルトガル人達とフランシスコ・ザビエルの一行だけだと思われがちだが、そうではなかった。鉄砲が種子島に伝えられた年から元亀元(1570)年までの27年間に、18隻のポルトガル船が島津領に入港したといわれ、その他のジャンクまで含めれば相当の外国人が鹿児島を訪れていた可能性がある。

とりわけ、天文15(1546)年に薩摩半島最南部の山川にやって来たジョルジュ・アルバレスは、マラッカへ帰る時に、3年後に来日するザビエルを案内したヤジローを乗船させ、のちにザビエルに引き合わせた人物である。アルバレスは約半年間山川に滞在し、多くのことを見聞し、ザビエルの要請を受けて山川滞在中のことを中心に『日本報告』を著した。これがザビエルに日本布教を決意させる重要な役割を果たしたと言われている。

人々は欲張りではなく、とても親切です。もしあなたがかれらの国へ行ったら、身分のもっとも高い人々は、家で食事をしたり、泊って行くように招待することでしょう。かれらはあなたを心のうちに入りたいと望んでいる、と思われます。

「あなた」とはザビエルのことであり、アルバレスの鹿児島人に対する評価はかなり高いものであった。さらに、山川には温泉があり、潮が引いている海岸で、多くの人々が穴を掘り、朝夕2時間ほど身体を横にして入浴していると記している。おそらく「砂むし」のことであろう。



写真3(上) 中国のジャンク  
写真4(右) 鹿児島市ザビエル公園内のフランシスコ・ザビエル像

写真2 伝島津忠久画像

### 藤原惺窩の内之浦での体験

ちょうど関ヶ原合戦の4年前の慶長元(1596)年、近世朱子学の開祖ともいわれる藤原惺窩が鹿児島に来ている。惺窩は徳川家康に朱子学を講じたほどの人物であり、のちに林羅山をはじめとする江戸時代前期の著名な朱子学者が多数入門している。惺窩は、直接中国の新儒学を学ぶために明に渡ることを計画し、この年の6月に京都を発って7月の半ばに山川に着いた。そして、秋頃から年末の頃に山川を出帆し中国に向かったが、途中大風にあつて鬼界ヶ島に漂着し、翌年の夏頃まで同島に滞在したと推定されている。

残念ながら中国に渡ることはかなわなかったが、この時の様子を記した惺窩自筆の『南航日記残簡』が大正年間に発見された。これによれば惺窩は京都を発って瀬戸内を経て、九州東岸沿いに南下して鹿児島に入り、まず島津義久と重臣の伊集院忠棟に面会し、忠棟から渡明の承諾を得ている。

興味深いのは惺窩の内之浦での体験を記した部分である。内之浦は長い宇宙の旅から奇跡的に帰還した「はやぶさ」が打ち上げられた大隅半島太平洋沿岸の街であるが、当時は東南アジアや中国の人々、あるいは海外へ渡航するために日本国中から集まってきた人々であふれていた。そこで地役人からはギヤマンのコップで葡萄酒のもてなしを受けたこと、西洋人の描いた「世界図」を見たことなどが記されている。おそらく、この頃の鹿児島の津々浦々では同様の光景が見られたのではなかろうかと想像する。また、惺窩も山川で「砂むし」を記しており、異国人にも他国人にもさぞかし珍しい風俗であったのであろう。

### 薩摩藩の金山経営

ところで、温泉は火山の恵みであるが、金鉱床も火山地帯の鹿児島には多い。それはマグマと熱水による働きであるといわれている。昭和56年に発見さ



写真5 明治時代の山ヶ野金山



写真6 明治5年の集成館

例えばポンペは、ここに建設された諸工業はフルに稼働していたとし、高炉のある溶鉱炉や大砲製造場、広大な鉄工所、鉄板製造場、磁器や陶器、それにガラスを造るための工場の様子を記録している。またこの工場群には、1,200人もの人々が働いていたという。さらにこれらの事

業を踏まえ、薩摩藩は間もなく、日本全国の中でもっとも繁栄し、もっとも強力な藩になるであろうと予言した。

業を踏まえ、薩摩藩は間もなく、日本全国の中でもっとも繁栄し、もっとも強力な藩になるであろうと予言した。磯に設置された工場群は集成館と名付けられた。この集成館を中心とした近代産業移入の事業は「集成館事業」と呼ばれている。

磯に設置された工場群は集成館と名付けられた。この集成館を中心とした近代産業移入の事業は「集成館事業」と呼ばれている。

磯に設置された工場群は集成館と名付けられた。この集成館を中心とした近代産業移入の事業は「集成館事業」と呼ばれている。

### 薩摩藩の地理的条件

本来国家的政策として進められるべきこのような事業を、なぜ幕末の薩摩藩において成し遂げなければならなかったのか。幕府の統治体制の弱体化もあったが、薩摩藩の特殊な事情もあった。

俗に77万石という薩摩の石高のうち、12万石余りは琉球王国の石高である。江戸時代初期から薩摩藩は琉球王国を領土的に支配していたから、治めるべき領地の形は長大で、しかもその大半が海であった。今日でも鹿児島県は南北に600kmもあるが、沖縄県まで含めれば南北1,300kmという、日本のどこにもない特殊な形をしている。しかも当時の欧米列強の黒船は琉球弧伝いに北上してくる。したがって、薩摩藩は他藩に先駆けて海の備えをしなければならなかったのである。

### 西洋人が驚いた工場群

薩摩藩が急速に近代化への動きをみせるのは、英明の誉れ高く、13代将軍徳川家定の夫人となった篤姫の義父でもあった島津斉彬が、嘉永4(1851)年に藩主になってからである。当時鹿児島を訪れた西洋人たちも近代化のスケールの大きさに大きな感動を受けた。

安政5(1858)年の3月と5月の二度にわたり、勝海舟に伴われて鹿児島湾に一隻の西洋船が入港する。船名をヤーパン号と言い、のちに威臨丸と名づけられた。この船で鹿児島へ来たオランダ海軍の軍医ポンペや一等尉官カッテンディーケは、日本滞在中の詳細な日記をつけており、鹿児島湾の印象について驚きをもって記している部分がある。それは、鹿児島湾の磯で行われていた西洋式近代産業移入の事業である。



写真7 琉球船模型



写真8 薩摩で造られた日本初の本格的洋式軍艦「昇平丸」模型



写真9 薩英戦争絵巻



写真10 薩摩藩英国留学生写真

### 海軍力の整備と産業の育成

産業革命によって欧米の資本主義経済は急速に進展し、それに伴って新しい市場の獲得が各国の最大の関心事となっていた。すなわち、斉彬の時代の日本及び日本近海は、欧米先進諸国の利害が微妙に衝突する場所になってきていたのである。

斉彬の集成館事業の目的は、薩摩藩一国においても黒船の砲艦外交に対抗し得る海軍力を整備し、ひいては諸外国と対等に交流することのできる豊かな国づくりにあった。昔から諸外国の文化は主として南からやってきた。ところが幕末の海は、それまでとは全く異質の危機を、やはり海から運んできたのである。以上の理由から、集成館事業の主たる目的の第一は軍艦の建造にあった。

このような歴史的事実をみても、明治政府の富国強兵と殖産興業の政策は、この時点ですでに鹿児島において先行していたことになる。むしろ、それを超えていたのではないかとさえ思わせる。鹿児島の青年達が誰よりも早く近代国家を認識し、それを具現化することができたのは、実際に集成館を見ていたからにはほかならない。斉彬はヤーパン号寄港の年の夏に急逝したが、ポンペの予言は彼らによって実現された。

### 薩英戦争のショック

斉彬の危惧していたことが、彼の死後の文久3(1863)年7月、しかもイギリス艦隊の鹿児島湾入港、相互の砲撃という形で起った。島津久光の行列を乱したとして薩摩藩士が英国人を殺傷した生麦事件を契機に起った薩英戦争である。この時集成館も砲撃を受け、あたかも斉彬の夢は灰燼に帰ってしまったかのようであった。

しかし、この戦争は薩摩藩に非常な刺激をあた

え、ますます西洋の文明の優秀さを痛感させることになった。またイギリスとの間に生麦事件や薩英戦争の和議が成

立すると、その長所を吸収するために急速にイギリスに接近するようになっていった。慶応元(1865)年には欧米諸国の文明を取り入れ、藩の近代化をはかるために、申木野の羽島から密かに森有礼ら19名の留学生と視察交渉員をイギリスに派遣し、五代友厚らには紡績機械の購入と技師の招聘を命じ、慶応2年には諸機械と技師たちが到着。翌年には磯の地に日本初の近代的紡績工場が操業をはじめた。ここには現在、技師たちの宿舎であった異人館が残され、往時を偲ばせてくれる。

### 青年達の受けたインパクト

感受性の鋭敏な青少年期に眼にした映像が心の奥に焼き付いて、その後の人生に大きな影響を与えることがある。特に、時代の大きな転換点に登場する人物には、それが強い印象となって、その後の人生の行動の規範に、少なからぬ影響を及ぼしたという事例はめずらしくない。

ところで、幕末から明治という困難な時代を当時の青年達はよく凌いだ。歴史上の大転換点はいくつかあった。なかでも明治維新は、長く続いた封建社会から新しい時代へ移行しようとする内部からの変革であったが、欧米列強のアジアへの進出という外圧の影響も強く受けている。いわば、日本が初めて経験する種類の国家存亡の危機であり、彼らは身命を賭して行動し、極めて短日の中に近代国家の基礎をつくった。アジアの国々が植民地化されていく中で、その危機を救い、日本の独立を守ったのは、これらの青年達が受け継いできた薩摩のDNAだったのではなかろうか。

<写真提供>

写真1 国土交通省鹿児島港湾・空港整備事務所  
写真2、5、6、7、8、9、10 尚古集成館蔵  
写真3 山形欣哉画